

高退協ニュース

夏季学習会 四十二名出席 で開催

二〇〇七年度夏季学習会は八月二十五日(土)、高知城ホール二階にて、昨年より五名多い四十二名の出席で開催されました。

最初の講座は、高知工業高校教諭の武田豊先生で、「今学校現場は」と題しての講演でした。全教職員が年間計画に基づく自己評価を校長に提出し、面接が科せられ、そしてそれが給与に反映される自己評価システムの導入などについて説明がありました。

質疑応答では、「つまりいた子ども達の問題をゆっくり話し合う余裕はあるのか」「職場会は開かれていますか」など様々な質問も出されました。多忙で余裕がなくなっている現場の実態をどう分析すべきか? 高退協として何ができ、何をすべきか、その課題が投げ返されたことになりました。



新任挨拶

松山 和雄

背中のザックが汗で蒸れる。地図を片手に路地の表札を見る。高知市で五十年以上生活しながら、見たことのない町並みに何かしら新発見を、そんな胸がときめく。11月の家を見つけたら、もう何十年も逢っていないその人の顔が浮かんでくる。私の担当は朝倉と曙町の十軒だ。ふと万歩計を見る。結構な歩数になっている。よし、あと三軒だ。ペットボトルの水を一口ふくんで次の家を探す。

高退協の役員になって役員会にも何度か出たが、このニュースの手配りが私には一番向いている。よし、次のニュースは早朝に配ろう。きつと、朝餉の香りが路地に満ちているだろう。



二人目の講師は、前県立歴史民俗資料館館長の坂本正夫さんで、「土佐の風土と県民性」と題して講演が行われました。

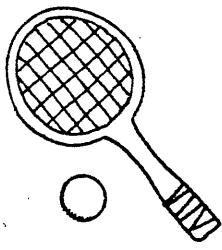
河野裕さんの三タン説「短気・単純・淡泊」を例に、土佐人の気質を、歴史的風土に基づくものとして分析し、歴史の教訓に学ぶことの大切さを強調され、高齢化の進む高知県にこそ発展のカギが隠されているのではないかと説かれました。

話し上手な坂本さんで、九十分の講演が、あっという間に過ぎていきました。また、後の懇親会には二十五名の参加があり、和やかに懇談しました。

新任ご挨拶

土居 正明

高退協加入は五年前になりますが、その後私学に四年ほど勤めておりました。昨年やっと非常勤になりました。早速「山の会」と「テニスクラブ(天王コート)」に入れてもらって、遊ばせていただきます。このたび、「遊ぶだけでなく、高退協の仕事もちゃんとせよ」とのお告げの如く、常任委員のお話があり、お引き受けすることにしました。どれだけお役に立てるか分かりませんが、がんばりますので、よろしくお願いします。



高知高退協事務局
2007-9-4
NO 1 4 8

高知県高等学校退職教職員協議会
〒780-0850 高知市丸の内2丁目1-10
TEL 0165018221
郵便振替口座 0165012111893

草声老語

自民党の大敗・公明党の後退によつて、参議院では野党が対立し、野党が成立しない政治状況が生まれました。まわりでは次のような感想がある。通うが、いづれもその通りだと思ふ。

のよう態度を取るか、注目されて投票か。後の世論調査は、美しくない。63%に共感できない。憲法改正に共感できない。倍首相の多数を拒否していい。

原稿募集「こうたいきょう」

内容 随筆 研究論文 紀行文 活動報告 小説 短歌 詩 俳句 川柳 その他
字数 約1000~3000字
締切 2007年10月末日
送先 〒780-0850

高知市丸の内2丁目1-10
教育会館内 高教祖氣付
高知高退協

機関誌の原稿を募集します。最近腹の立つこと、思い出話、孫の成長ぶりなども載せます。文章を書くと脳が若返ります。同封の「会員近況」にも切手を貼って投函願います。

新任挨拶

退職して4年目、今年から事務局の一員として、少し無理気味に送り込まれました。胃腸の全摘手術後2年間抗がん剤治療をし、まだ病氣と上手につきあう段階ですが、少しでも役に立てればと、末席を汚しています。好きなことは率先してできますが、しんどいことは本当に苦痛に感じるようになりまし。わがまま度が上昇中の毎日です。よろしくお願ひします。

梶原 詳三



温泉昼食会

日時 2007年10月11日(木)
行先 中津溪谷 ゆの森

親睦旅行

日時 2007年11月8日(木)~9日(金)
行先 万福寺 びわ湖 近江八幡

温泉昼食会・親睦旅行いずれも詳しい案内を別紙で同封します。参加をお願いします。

シリア・ヨルダンの旅

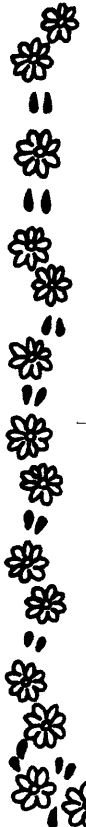
坂本敏子

友達とシリア・ヨルダンに行つて来た。「大丈夫？」と心配されたが、戦争を意識したのは、今、イラクの国境近くを飛んでいると思つた時と、死海で浮遊体験をした時ぐらい。死海の対岸がエルサレムだと聞いた。

死海はリゾート地で要するに日本の海水浴場。砂地のプールは大人や子供で賑わい、塩分の濃い湖にはぶかぶかと人が浮いている。私もゴーグルと水泳帽で武装しひよいと仰向けにのけぞると簡単に浮いた。(うつむくと塩分が目に入るので駄目)面白い。しかし底は泥、田んぼに入つたみたい足の間を泥がよるよるとはみ出る。

旅の目的は両国の世界遺産、シリアの古代都市パルミラとヨルダンの古代都市ペトラ遺跡を見ることだった。

両都市ともオアシスに生まれ今は廃墟と化しているが、その規模は広大で、神殿、列柱、円形劇場などがあるいはほぼ完全に残り、あるいは崩れ落ちて砂漠に広がる。世界史で最初に習つたチグリス・ユーフラテス。ユーフラテス川はパルミナの遙か北を流れる。高校の授業とこ



千葉・八千代からの便り

市川 まさ

酷暑の夏でしたが、会員の皆さん、お変わりはいかがですか。役員の方々には何かとご苦労でございます。高知を離れてからは前にも増して「高退協ニュース」を身近に感じて愛読しています。

二〇〇五年秋、次女の住む八千代市に居を移してまもなく二年になるうとしています。旧宅の様子を見に帰高するたびに「やはりここが我が家だ」とくつろいで過ごすのですが、二、三週間後、飛行機、電車と乗り継いで八千代緑ヶ丘駅に近づく、「やっとなんて帰ってきたのだ」と安堵するようにもなりました。

二〇〇八年代は千葉市の北に接し、都心へも電車で五〇分足らず、成田空港へ六〇分、羽田へは八〇分という位置にあります。

こが結びついた。

シリアの首都ダマスカス近辺は肥沃な畑が続いて、国土全体がこんなふうだったらなあと他人事ながら嘆息が出る。車窓の風景は殆ど不毛の土くれの連なりだった。でもこの乾燥が遺跡を守ってくれた。徹の高松塚とは違うのである。

暑い！空と足元から攻められる。帽子に日傘、長袖、サングラス、ペットボトル。パルミラではバイクで我々の廻る先々に出現する飲料水売りのおっさんがいた。高知ならアイスクリン売らるうか。

ペトラの遺跡を囲む禿げ山の頂まで登った時は、日陰は皆無。老若男女皆へばった。帰途は、命には換えられないと高い料金を払って馬車や馬に乗った人が多かった。私も息も絶え絶えになりながらも一番安い、つまり一番短い距離を馬で、やっとなんてに帰った。

その日の夕食、私たちのテーブルの男性は殆ど食欲がなかったが、私と友人は変わらず健啖で、口には出さねどこのばあさん達にはかなわんなあという目であった。

旅は無事終わった。でも癖づいて早や次の旅を考えている。



十年前に東葉高速鉄道(東京メトロ東西線乗り入れ)が開通

し、畑や牧場が多かつた地に開発が進み、駅周辺が瞬くまに都市に変貌した所です。でも家を出て十分余りも歩けば起伏する丘や雑木林や広い農地の中に立つことができ、辺りを歩くたびに野の草や花を採っては花瓶に活けて楽しんでいきます。

植生も高知とは少し違って牧場跡らしくアカツメグサをよく見かけるし、ツルナスビやウラボシなどを初めて目にしたり、ナルコユリやキンランがコブシの大木がある雑木林に自生するなど、新しい出会いがあり、スケッチブックが埋まります。

夫婦で数年前に開設された近くの公民館併設の図書館をよく利用し、また電車で一駅先の市民会館での催しに出向いたり、時には都心でのオペラやコンサートも楽しんでいきます。国の施策は医療や税制の改善

手配り

高退協ニュースを奇数月に発行し全会員へ届けています。約半数は宅急便で、残りの半数は手配りです。手配りは役員その他若干の協力者で当たっています。催しものの案内を同封することもあります。「郵便受けに入れといてくれたらいいのに」と言う会員にはそうしています。

配ってきた時は必ず声を掛けてくださいと言う方もいます。手配りは経費節約と言うよりも情報交換です。健康や病気の話題が多くなります。歯医者はどこが良いとか、前立腺や子宮癌の評判の良い病院の話も出ます。「旅行には行きたいけれど、わしや脚のうがわるうてのう」とのお話から温泉昼食会が実現しました。「よその猫が我が家の庭に無断で糞をして困る」との糞害(憤慨)には、猫が嫌う薬を薬局で販売していると述べたこともあります。「夫は元教員ですが、年を取ったら理屈ばかりこねて、まっことよわるちや」と老老介護の苦情も出ます。

配る人も忙しくて時間を取れないことも稀にありますが、大体ゆつくり話のできる余裕をもって手配りに出かけます。秋には花の種の交換もします。風で遠くへ飛んでいって、話の種に花が咲きそうです。

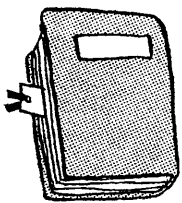
三谷隆彦



で高齢者に厳しく許せませんが、まずは健康でなければと前々からは玄米食も続け、日々の食事には気を配っています。幸い目下のところ献立を考えたり調理をするのが楽しいので、まだ暫くは呆けなかなと自らを励ましていきます。(夫からは「年齢を考えよ、呆けたと自覚せよ」と常に言われていますが...)できれば秋にも帰高し、高知の山にも登りたいなどと思いがら過す昨今です。

老眼鏡

『昭和の遺書 南の戦場から』 辺見じゅん 文藝春秋



松本 瑛子

年をとると、新聞を見る時間が長くなり、読書量が減る。祖母の日だまりで新聞を読んでいるのか眠っているのかわからない姿が思い出される。カタカナ語(ワンダフルとか)が使われ出し、この頃わからん言葉が増えて困る」とこぼしていた。その光景が五〇年後の自分の姿とは考えなかつたが。

『昭和の遺書 南の戦場から』は、南方戦線で亡くなった人たちが八二人の戦地からの手紙を収録したものである。年齢は一九歳から六二歳までだ。

「内地はもう草取りの最中だろうね。今年の植付はどうだ」。ピルマで、青田の中を行軍しつつ、故郷を、両親を案じた手紙。

「僅かで済まないが無一物から築いた汗の結晶だ」と、遺書に認めた貯金や保険金は戦後インフレで価値を失ったが、妻はこの遺書を片時も離さず心の支えとした。

「あなたをこんなに切なくおもつてるようとは、切ない思いがわき起こつてまいります」。軍事郵便には検閲があり、妻子への哀惜の情は女々しい振る舞いとして制裁の対象になった。それでも伝えなければならなかつた。

「一子サン、今日ニッポンノハナト ツバメガツキマシタ」。一子さんが生れる一ヶ月前に出征し、見たことも抱いたこともない娘に三百余通の手紙を残した。

マキン島で玉砕、タラワ島で玉砕。これらの島々は地図帳に点でしか示されていない。名も知れぬ南洋の島にまで屍を曝さなければならなかつたのか。

私どもは、「戦地からの手紙」を編集しています。戦争を忘れないために戦地からの声を聴きたい。家族がどんなに手紙を大事にしてきたかを伝えたいと思います。手紙をお持ちの方、編集に参加してくださいませんか。

読書会のこと

この6月21日、読書会が百回目を迎えた。とりあげられていた図書は藤沢周平の小説「雪明かり」で、終了後、ムトー荘の手料理で記念祝宴。思い起こせば、最初の集まりは、90年9月15日、参加者は浜田、中田、坪井の3名で、テキストは暁峻淑子著「豊かさとは何か」であった。爾来、いつの間にか17年の歳月が流れていた。発足当時を振り返れば89年の事務局会議で、クラブ活動が話題になり読書会も公認された。このサークルの発想は、高知工業定時制の職場活動に源泉があったように思う。当時同校には東元、産田、上

田等々、高等教祖のそうそうたる論客が在職し、「梁山泊」のような雰囲気教育活動、組合運動に結集していた。その中から、研究会「木曜会」が生まれた。論議は森羅万象に及んだ。当時少年であった

森羅寺成月日記

坪井 幹之

私には、またとない機会であった。退職後、再度このような集まりを持てたらと思っていたので、早速読書会を提起した。当然、活動の舞台は狭まっていたので、読書を主題とするサークルになったわけ

である。一応、毎回、課題テキストは決めていたが、話合の領域は全く自由である。またとりあげる本も、政治、経済、時事、文学、自然科学、など森羅万象にわたっている。次回8月23日の課題テキストは米沢富美子「人物で語る物理入門」(岩波新書)と小川洋子「博士が愛した数式」(新潮文庫)の2冊。自然科学に関わるものが久しぶりに登場した。今までに百数十冊が取上げられているが、自然科学に関するものは僅か3冊にとどまっている。人類の文化・文明の歴史からみれば、たいへん跋行的である。さて、次回、論議はどう発展するか、興味津々である。

戦争を語りつづ

「八・一五国民のつどい」

戦争の悲惨さを次世代に伝えようと、六十二年目の終戦記念日の十五日、平和集会在高知市内各地で開かれました。

そのうち、高知城ホールで開かれた(女性)九条の会「高知主催」には、百十名余りが参加。戦争の悲惨さを訴え、平和と憲法九条の大切さをアピールしました。

集いでは、近藤久子(元劇団機軸メンバー)さんが井上ひさしさんの「子どもに伝える日本国憲法第九条」など、詩人や作家の4つの作品を朗読しました。続いて市内に住む元教員の矢野時子さんは戦前、治安維持法のもと、天皇制を批判する近所の在日朝鮮人から聞いた話や、戦死した青年学校の教員から日直前に「先生、どうしても死ななといかんのか」と尋ねられ、答えることができなかったことの悔恨などを、戦争を繰り返さない取り組みを呼びかけました。

元参議院議員の西岡瑠璃子さんが退職者婦人教職員の手記を朗読し、新日本婦人の会のサークルがうたご絵を演奏。会場からは、原水爆禁止世界大会に初めて参加した女子大生が「平和はむずかしい問題ではない。平和の大切さを学び、広げるためにがんばりたい」と力強い発言

がありました。

高退協からは、ほんの数名の参加でした。戦争を美化するような機運があります。「美しい国」戦争のできる国」という言葉が象徴するように、抽象的で感情的な動きです。体験者の証言や手記を持つ具体的事実が、その歯止めになります。わたしたち一人ひとりが語り部となる時がきています。(小澤・報告)

短歌

仮谷 仁先生名著成る 榊原 忠彦
その知性、政治学のみにとどまらず 感性ゆたかに美を極めたる (仮谷 仁著「美と芸術短評集」)

スクラップ「紙上追体験の『あの戦争』敗戦濃き日誌読む終戦記念日 (平成十一年一月二十四日産経新聞掲載の昭和十九年一月二十四日三十日の真相日誌)

「月影兵庫」、松方弘樹の剣さばき、鳳館で観しその父想う

(その父とはわが少年時代嬉しみし大都映画の近衛十四郎のこと)

ガンジーの言葉

山本 晶子
国の借金八三四兆円、日本の国はどうなるのだろうか

国保料払いえぬゆえ医者にかか

私の不健康日記
救急車に乗る

田所 昌澄

静かな深夜の団地にピーポーと救急車がやって来る。隣近所の住民が起きてきて担架で運ばれるのを覗きこまれる。これだけは恥ずかしくて嫌だと思っていた事が現実となった。寝る前に歯磨きを始めたが手がガクガクとして磨きにくい。指が思うようには動かせず全身が重苦しい。今までに経験したことのない体の異常である。一瞬これは脳梗塞ではないかと不安になったが意識は正常である。とにかく横になろうと階段を這い上がり寝室に入ると妻が目を見まし驚いて救急車を呼んでくれた。癌全身に転移せしもう

『貧困は最悪の暴力である。』
ガンジーの言(げん)ノートに書きたむ

トロンマ

叶岡 淑子

『皮膚は垂れ内臓震うを直視す』と被爆者を詠みし歌を直視す

『オカアチャインタイヨアツイヨアツイヨウ』この地獄図トロンマの世の

『トロンマを遠い話とせよ』と子ども代表の言葉きたり

(8・6『平和への誓い』)

だ。嫌だなど思いながら妻の電話の対応をぼんやり聞いていた。救急車がくるまで体を海老のように曲げて横たわっていた。救急車のベットのベルトで固定され指先に装置をつけ脈拍や血圧を測りながら病院に向かった。曲がり角では体が振られる様になる。

病院に着いたときには体の硬直感は大分和らいでいた。診察が始まったが熱が出てきて肺炎の入院歴があるのでX線撮影を受けた。問診は記憶力を確かめるような質問が多かった。脳梗塞ではなく急性薬物中毒を疑われたが心当たりは無い。なんらかの細菌が血液に入って起こる急性の感染症の可能性が高く抗生物質の点滴が始まった。点滴を受けている間に二人の患者が運ばれてきて診察室内は医師、看護師の動きが激しく付き添いの人の声が耳に響く。深夜に詳しい検査はできず救急用ベット不足で点滴が終われば帰宅してくれと言われた。

車椅子からタクシーに乗ったが運転手が最近このような患者を乗せたことがあると話してくれた。午前三時帰宅。一週間抗生物質を服用してもとの体調にもどった。

救急隊員の親切さが身に沁み救急治療室の多忙さを実感した一夜の騒動でした。



西国川柳平和の旅 第二回
小澤 幸泉

豪商紀文赤き結縁(金七)の

流れ来ていずこの

果てか粉河寺(第三番)

眺望が汗をねぎらう

雨しきり探しあぐんで

龍蓋寺(第七番)

喘ぎつつ清き泉の

上醍醐(第十一番)

政争の幼き得度

元慶寺(番 外)

(次号へ)

相撲ニ知識 (七十八)

林 勤

相撲協会八十年を振り返る

二、昭和二十一年〜二十五年
東京両国国技館が昭和二十年空襲で炎上、その後進駐軍に接収され、本場所開催場所を転々とするなど、相撲界もまた「戦後の苦難の時代」であった。

昭和二十一年

○両国国技館(20年10月に占領軍から接収の通達を受け12月に接収されていた)は占領軍によりメモリアル・ホールと命名された(9月)。

○十一月に戦後第一回目的の本場所が開かれた。(メモリアル・ホール、優勝は横綱羽黒山(13戦全勝)、史上只一回、一年一場所の年となった)。

○双葉山断髪式(11月19日・メモリアルホール)

○力道山新入幕(11月)

○玉ノ海引退(10月、玉錦の一番弟子で元関脇)

昭和二十二年

○夏場所はメモリアル・ホールの使用許可が得られず、六月になって明治神宮外苑相撲場で晴天十日間興行。

○相撲人気向上策として、次の三つを実施し好評であった。

- ①優勝決定戦(夏場所から)
- ②三賞制度(秋場所から)
- ③一門(系統)別総当り(秋場所から)

※夫々については高退協ニュース137、138、139号で詳報(済)

昭和二十三年

○秋場所は大阪・福島公園仮設相撲場、大阪では昭和七年以来の本場所。

昭和二十四年

○夏場所、この場所より十五日間興行となる。優勝は入閤増位山・13勝2敗。
○蔵前国技館上棟式(12月)

活動日誌

【八月】

四日 人権共闘
総会・学習会
六日〜九日
原水禁世界大会

(蔵前国技館は昭和59年まで、翌60年から両国国技館へ)

○横綱前田山が本場所を休場中に後楽園で野球観戦。結局引退となる。

昭和二十五年

○春場所から東京の本場所は蔵前国技館で開催される。

春場所新小結・栃錦、新入幕若ノ花。相撲史に残る栃若時代近し。

○関脇力道山、突如廃業(9月)

どうなる? 朝青龍問題

八月一日に日本相撲協会が朝青龍処分を発表して以来毎日報道され迷走を続ける朝青龍問題。

朝青龍のゴネ得か? 理解できない北の湖理事長や高砂親方らの対応、それにしても事の発端は全治六週間の疲労骨折という診断書を出して巡業を休み、モンゴルへ帰ってサッカーをしていたのを忘れて精神科医が中心になり、モンゴルへ帰すの帰さないの議論評しているのは理解に苦しむ。展開によっては大相撲の将来に禍根を残しかねない問題山積のこの騒動、目は離せないが日々変転するので論評のしようがない。一段落し、機会があれば私見を述べさせていただきます(平成19・8・25) (林)

十五日

戦争を語り
織ぐ集い

十六日〜二十日
全国教研

二十五日
高退協
夏季学習会

【九月】

九月一日
三千万署名
スター、集会

西森美代子さんが

逝去されました。

六月四日
逝去されました。

慎んでご冥福を
お祈りします。

宮崎昭夫さんが

逝去されました。

六月二十三日
逝去されました。
慎んでご冥福を
お祈りします。

登山学校で腰痛を治す

島本 聡

腰が痛い。椎間板ヘルニアの手術の後遺症か、百姓特有の腰痛か、待望の退職後に計画していたことの三分の一も実行できていない。同じ腰痛持ち松山さんは云う。「腰痛には歩くのが一番、それから水泳、あと腹筋」。よし、私も負けずにイオンのスポーツジムにて鍛えよう。ジムの指導員に号令をかけてもらって、腹筋や、水泳をやっているうちに、号令無しで一人でやることに出来なくなってしまう。かけ声なしで毎日三十分以上も歩かないでできそうもない。そんなとき市民登山学校の生徒募集が放映される。よし登山ならみんなと一緒に。山の途中で、ギブアップはできない。ついでに松山さんも誘いこんでやろう。

登山の用具を買いに行く。靴、リュック、雨具、コンパス、どれが良いのか教えてほしいと店員にたのむと、「お客さん一度登ってからの話では」となかなか売ってくれない、女房の回し者か。

最初の登山。登山口にて、班ごとに登る順番をきめる。前から2番目。喜んではいけない。グループ内で体力的に一番弱い人の位置である。

弾力のある小道を、溪谷を歩いてしばらく歩く。途中水が激しく流れる沢を横切ることになる。買ったばかりの靴を、濡らしたくはない。棒高跳びの選手のように、長い棒を水中に立てて流れを飛び越す。「そんなことをしては駄目です。捻挫でもしたらどうしますか。」すみません。老人になつているのを忘れていました。

腰痛がいつ爆発するのか、恐れながら登る。さおりが原に着。溪谷が土砂に埋まり巨木が林立する公園のような雰囲気。場所。砂の上に寝転がって休みたいと思うのだが皆さん立ったまま、トイレ休憩のみ。私より5、6才は年上の人が数名いるのに、登り慣れている様子で周りの花の名前を確認しあっている。登山初心者募集は嘘か。

「それではコンパスをみて自分の位置を確認しながら、尾根

づたいに第二目的地のカヤハゲにいきます。PLのかけ声である。ここから登りばかりが二時間以上続くようだ。エスケープするならここだが、腰痛に良いからと、自分のつえを貸してくれた人や、同行の講師の人たちに悪い。何とかなるだろうと一緒に登ることを決意する。

標高差600mぐらゐを登る、登る、下る、登る。息が切れてくる。昨年冬行った標高3000mのアメリカのスキー場より遙かに息切れがする。「先に行ってください」二番手の位置を換ろうとする。SLが直ぐに「少し速いですか。少し休みましょうか」と気遣ってくれる。20人の全体の歩調を乱すことになるので、頑張る。吸う、吸う、吐く、吐く、生徒と一緒に走ったマラソン大会のようだ。「あと何分、あとどれくらい」と聞くこと数回。やつとカヤハゲ山頂に到着。食事だ。あいにくと途中から激しくなった雨を避けるように低木の木陰に入り昼食をとる。「パンは皿の上で、冷房は28度以上、野菜の種は買いたくない」と少々口やかましくなりつつある妻のにぎつたおにぎり3個、ちくきゆう2本、裏山で飼っている土佐ジローのたまご焼き2切れをほうばりながら、足元をみる。豆納豆を乾燥させたようなカモシカのフンがあたり一面にばらばらとちらばっている。

更に歩くこと一時間、白髪山頂の標識が笹原の中にあられる。「その岩場から、下を覗けば素晴らしいです」と云われて、怖々岩から身を乗り出してみる。もやの中、冷たい風が吹き上げてくるのみで何も見えない。「天気の良い日にまたここにくるぞ。今度はラジコングライダーを持参して、体力をつけて。」やりたいたことがまた一つ増える。山頂からバスの待つ白髪駐車場まで階段状の道を一貫に駆け下りる。登り始めてから、6時間半、登山完了。雨の中の山登りで条件としては最悪のはずだが、心地よい疲労感にひたっている。一生つき合う恐怖の腰痛のことは、すっかり忘れていた。

第十六回全退教四国ブロック交流集会

日時	11月12日(月)から13日(火)
場所	大歩危・祖谷阿波温泉 あわの抄(旧かんぼの宿)
テーマ	「平和を求めて仲間とともに」
費用	11,000円(1泊2食 交流会費含)

四国の退職者の仲間と、交流してみませんか。
申し込みは、高退協事務局まで